

ムーティとウィーン・フィル 共創の賜物、歓喜の響き

2021/11/26 5:00 | 日本経済新聞 電子版



巨匠ムーティの指揮が豊かな音の響きを生んだ©森口ミツル

ムーティほどウィーン・フィル本来の資質と自発性を生かせる巨匠はもはやいない。楽友協会大ホールさながらの芳醇（ほうじゅん）な響きに、苦境と国境を超えて魂が浄化された（11月7日、大阪市のフェスティバルホール）。

モーツァルトの「ハフナー」交響曲の冒頭から異世界に誘われた。1階前方席にもかかわらず、刺激的な直接音は聴こえず、すでに全ての楽器が有機ブレンドして全身を包み込む。ゆとりに満ちた自然体の歩みは王者の風格そのもの。いささかの力みもない境地から生まれる存在感こそがモーツァルトの神髄なのだ。隠れた妙味をゆくりなく引き出す名匠の慧眼（けいがん）に何度も溜息（ためいき）をついた。

遥（はる）かなホルンの憧憬から始まるシューベルトの「グレート」。滔々（とうとう）たる大河の流れに身を任せつつ、天と地、愛と死を往還する魂のドラマに没入した。第2楽章の白昼夢が白眉だった。洗練を極めた声部のつながりと重なり陶然。たまさかの慟哭（どうこく）と沈黙、そして静謐（せいひつ）な歌から再び湧き上がる生への気力。これほど繊細かつ力動的にシューベルトの深淵を看破した演奏があっただろうか。

スケルツォ楽章の中間部における悠久の歌謡性から宇宙の鳴動への高揚感は終楽章への伏線だった。はじめて激情を露（あら）わにドライブするムーティに嬉々（きき）として相乗する名手たち。飛び跳ねるヴァイオリンのリズムがカタストロフへの切迫を刻む。それはしかし、哀（かな）しみの底を突き抜けた歓喜の乱舞に変容する。アポロ的造形美を背後から襲うディオニュソス的な根源の力に圧倒された。

ムーティとウィーン・フィルの半世紀にわたる共創の賜物（たまもの）を恵与された満堂の聴衆の中に、数多くの中高生の姿があった。未来への希望で胸が熱くなった。平和の使者との出会い。文化庁の青少年支援に感謝。

（音楽評論家 藤野 一夫）